國學院大學学術情報リポジトリ

國學院大學における学会活動と教育

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 齊藤, みのり メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000700

國學院大學における学会活動と教育

齊藤　みのり

はじめに

現在、國學院大學には様々な学会が活動しており、例会・大会・研究雑誌の発行等が行われている。

筆者は以前、戦前の国史学会における教育活動に焦点を当てた分析を行ったが、[1]国史学会以外にも、戦前より國學院大學には様々な学会が設立されている。特に大正―昭和期には、現在も活発な活動を行っている国文学会、現在は中国学会と名を変えた漢文学会、加えて今は無き道義学会といった学会が設立され、それぞれ活動を行っていた。これらの学会は、國學院大學の研究者及び研究活動と深く関わってきた組織であり、研究発表の場となってきた。一方、その活動が現在の学会と同じであるとは限らない。特に戦前の国史学会で、様々な教育活動が展開されたことを鑑みるならば、[2]他専攻の学会でも同じようなことが言える。そこで本稿では、戦前に設立・活動してきた本学の学術学会について、その活動の推移と特性について概観し、当時の学会が担った役割を明らかにしたい。また、そのような学会が太平洋戦争を経て、戦後、どのように復興し、あるいは変化していったか、戦後十年までのその後の活動につい

ても着目し、分析を行う。なお、国史学会については拙稿「戦前・戦後期における国史学会の活動と教育」で詳細を扱っているため、本稿では扱わず、それ以外の三学会、国文学会・道義学会・漢文学会の活動を分析する。

一　各学会の設立と機関誌の発行

はじめにでも触れたが、国文学会・道義学会・漢文学会は、明治四十二年に発足した国史学会を追うように、大正―昭和期に次々と設立されていった学会である。ここでは、國學院大學における戦前の学会設立と、例会・講演会や機関誌発行など、基盤となる活動を確認していく。

①　国文学会

国文学会は、大正三年（一九一四）五月、本学卒業生を中心に、国語国文学の研究を目的として発足した。第一回研究懇話会は、五月八日本大学講堂で開催され、幹事長三矢重松教授が開会の辞を述べ、次いで安藤英方が会の主旨を説明の後、山根緝一郎「新領土における国語の普及」、石井登久一「日本文法上、固有名詞と普通名詞との区別不必要論」、宇治田誠也「新派和歌と旧派和歌と」、折口信夫「用言の語源につきて」の研究発表が行われた。[3]

結成当時の国文学会会則では、国語国文並びにこれに関する諸種事項を研究する事を目的とし、特別会員を本大学講師とその他賛成者、賛助会員を本大学卒業生、普通会員を本大学在学生とすること、月一回の研究懇話会を開催すること等が記されている。[4]これより国文学会例会は活発に行われ、盛況を呈した。但しこの段階では、三矢重松教授の個人的な団体で、大学の公的なものでは無かったため、昭和三年（一九二八）二月に上田万年学長の手によって、改めて現在へと続く「国文学会」が確立された。その規定には一条目に、本学学部国文学科学生及び関係者によって

組織することが記され、学生の在籍を明言している。四条目には学生委員を置く事も記されており、学生が運営に関わっていた。更に、大学の学会となった事で、例会・大会についても改めて規定され、第六条にて毎月一回の例会と毎年春秋二回の大会を規定している。[5] これを以て、国文学会の下地が形成された。この上で展開された例会・研究会活動は、例えば昭和十二年では、次のようなものであった。

〈史料一[6]〉

一、公開講演会

○春季大会「万葉集を語る会」

東歌論　金田一京助氏

万葉集編纂の材料　武田　祐吉氏

万葉集の問題　折口　信夫氏

○秋季大会

まことをせめる　齋藤　清衛氏

一、例会

○五月例会「もののあはれ論私見」　島津　久基氏

○六月例会「歌舞伎脚本の特殊性」　守随　憲治氏

○九月例会「琉球神道記」　筑土　鈴寛氏

○十月例会「国文学の今日の問題」　風巻景次郎氏

○十一月例会「大閤記の成立とその文学史的意義」桑田　忠親氏
○一月例会「国文学に於ける実証的態度」　松田　武夫氏

金田一京助や武田祐吉ら、当時の第一線で研究を行っている者達によって、例会・大会の報告が行われている事が指摘できよう。以後も活発な活動が行われていた事が、機関誌『国文学論究』彙報欄からは確認できる。

また、昭和十一年には秋期大会の代わりに絵巻・奈良絵本の展覧会を開催している。[7] 十月十六・十七日に渡り、絵巻十三点、奈良絵本四十点、丹緑本四点を、本館三階第六教室を借り、展示した。目録には「従来国文学研究の上より比較的不遇であつた奈良絵本をば展覧に供し、これに加ふるに絵巻・丹緑本をも併せ陳列して、その成立展開の相を形態的に明瞭ならしめた」とあるように、[8] 国文学の研究に資する目的でこの展覧会を計画した事がわかる。

これらの研究活動が確認できるのが、機関誌『国文学論究』である。『国文学論究』には彙報欄が設けられており、当時の学会活動が確認できる貴重な史料でもある。昭和九年五月創刊号に掲載された論文は、金沢庄三郎「「がてら」と「がてり」に就いて」、石幡五郎「文学の史的領域に就いて」、武田祐吉「源氏物語に於ける対偶意識」、折口信夫「副詞表情の發生」、土田知雄「晡時臥之山説話の考察」、佐藤三郎「日本霊異記訓釈の研究」、佐藤謙三「枕草子と女房日記との交渉」、中村浩「源氏物語の作者」、宮崎良朝「樋口一葉に就いて」、榊田凌次郎「花袋の自然主義小説に就いて」、田邊正男「「まし」の語法に就いて」、上田知麿「本居宣長の音韵学」であった。この機関誌刊行も相まって、国文学会の活動はますます盛んになっていった。以降、基本的に年に一―二巻ペースで刊行されていたが、戦時下の影響か、昭和十八年四月を最後に刊行が途絶えている。しかし、戦後、昭和二十二年に、『日本文学論究』と名を改めて刊行され、以後現在に至っている。

② 道義学会

大正九年（一九二〇）、大学令に拠る大学部に道義学科（倫理科・哲学科）が設けられた。道義学科と神道学について髙野裕基氏は、「河野省三に代表される道義学科では、その「神道」の思想史的・精神史的な方面を担う学科としての位置づけがなされていたと指摘できるのである」としている。[9] 大正十四年三月には一期生を送ったが、その年の秋、同学科学生を中心とし、関係講師を特別会員とする道義学会が設立され、翌十五年六月十二日午後一時半、第一回例会が道義学科研究室に開催、会長に筧克彦博士、評議員に小柳（司気太）・松永（材）・西田（宏）教授、中野佐柿並びに川口・篠原両学士、道義学科学生の外に国文及び国史学科生等二十余名が出席している。[10] 以降も、例えば昭和二年五月には、学生古田氏による「明治初年に於ける神道的教化運動」の研究発表、[11] 昭和三年十一月には文学士梅本寛一氏による「セオクラシイと我国祭政一致の観念」の発表が行われており、在学生・卒業生らによる報告が中心であったようである。一方、公開講演会については、その道の第一人者達が報告を行っている。昭和三年の例を挙げると、六月十六日に筧会長の挨拶の後、本学教授松永材「学術研究と実際運動」・文学博士深作安文「我国現下の思想問題」・文学博士紀平正美「日本民族と座の観念」が行われている。

また、例会や講演会以外にも、展覧会も幾度か開催している。昭和七年には十一月四日から、皇典講究所創立五十周年記念展覧会の一環として、「明治初年の教化運動」と題した展覧会が行われている。[12] 本展覧会では、明治二年から同十二・三年頃までの思想界を統一した国学者や儒者の文書等の史料を公開した。また、昭和十一年には十月に開催された学術展覧会において、国体・神道に関する重要書籍展覧会に中臣祓に関する註釈書類を展覧したとある。[13]

もう一つ、道義学会で行われていた研究発信としては、機関誌を始めとした出版活動が挙げられる。昭和八年に至り懸案の機関紙『道義論叢』第一輯を刊行した。『道義論叢』第一輯の発刊の辞は小柳教授が執筆、収載論文につい

ては、河野省三「明治維新以後に於ける日本精神の自覚の過程」、田中義能「家族制度は果して崩壊するのか」、岸本芳雄「大国隆正と復古神道」、桑貞彦「神皇正統記の仏教観」、西田長男「国民道徳史の方法についての試論」であった。この第一輯刊行後、翌年に第二輯が刊行され、更に第三輯からはテーマ毎に論文が掲載されるようになった。昭和十一年に第三輯「本居宣長研究」、昭和十二年に第四輯「幕末勤王思想の研究」、昭和十三年に第五輯「武士道の研究」が刊行されている。また、第六輯として「日本学の問題」が昭和十四年に刊行予定であると当時の「大学新聞」に記されているが、[14] 実物が確認できないため、実際に出版されたかは定かでは無い。いずれにせよ、これ以降、『道義論叢』の刊行は確認されず、この頃を最後に機関誌刊行が下火になったと考えられる。この他、鈴木重胤の『祝詞講義索引』が当時道義研究室の元助手であった高澤信一郎によって編纂され、道義学会から刊行されている。[15]

以上のように、同学会では神道及び哲学系の研究・発信等が行われており、以後も活動が行われた。しかし、戦後は活動が一切確認できず、消滅したと考えられる。

③ 漢文学会

漢文学会は現在の中国学会の前身となる学会であり、昭和五年（一九三〇）四月、國學院の漢文学研究の発展を期する有志が集い、創設された。[16] 昭和六年六月には初めての講演会も行われ、小柳司気太「東洋思想の二大潮流」・諸橋轍次「名と先秦の諸子」の講演が行われている。一方、漢文学会は、本学の漢文学科設置についても働きかけている。昭和六年十月に本大学漢文学会及び一般有志の発企を求め、学部の一科として漢文学科の設置を大学当局に対し請願する事になったが、漢文学会では有志の署名を整え江木所長宛に建白書を提出している。[17] 結局、この際には請願は受け入れられなかったが、以降戦前・戦後期を通し、漢文学会は本学の漢文学に関する研究において、活発な学術

活動を展開していた。

漢文学会の例会・講演会について、第一回講演会以降もコンスタントに例会・講演会を開いている。おおよそ年に三回程度の例会と一―二回の公開講演会を行っている。例として、昭和九年の例会・講演会を次に挙げる。

〈史料二〉[18]

例会

十月廿五日　礼経研究の一方面　齋伯　守先生
十二月十五日　志那の学校発生に就いて　牧野　巽先生
二月六日　詩経に現れたる酒　安藤　円秀先生

公開講演

六月三十日　神道と儒教道教との交渉　飯島　忠夫先生
志那詩の一側面　津田左右吉先生
一月十九日　国学としての漢学　諸橋　轍次先生
春秋に関する二三の考察　佐藤文四郎先生

漢文学会の例会の特徴としては、「先生」と呼ばれる立場の者が主に報告者であった事が挙げられる。同会の研究発信媒体である機関誌『漢文学会会報』の彙報欄を確認すると、例えば翌十年の第一回例会は教授の松田寿男、第二

回例会は文学博士飯島忠夫、第三回・第四回例会は教授の藤野岩友・小柳司気太であり、[19]以降も第一線の研究者達の報告の場となっている。公開講演会についても、五・六月頃行われる春期講演会、十月頃行われる秋期講演会の二回が行われ、小柳司気太・荻原拡（昭和十年五月）[20]、大浜晧・高橋龍雄・市村瓚次郎（昭和十一年六月）、田辺尚雄（昭和十一年十月）など、[21]バラエティ豊かな講演が行われている。特に田辺尚雄は音楽学者であり、「経書に現はれたる志那の古学　八佾舞の映画　レコード使用」という興味深い内容の講演を行っている。漢文学・東洋史だけでは無い講演活動は、同会の活発かつ柔軟な活動を垣間見る事が出来よう。

これらの情報が確認できる『漢文学会会報』は、昭和十年二月に創刊された。当時の会長は斎藤惇教授で、創刊号の発刊の辞は斎藤教授と小柳教授、掲載論文は、諸橋轍次「国学としての漢学」、齋伯守「礼経研究の一方面」、澤田総清「本邦古代の漢文」であった。以降五号までは年一冊のペースで、六号は五号と同じ年（昭和十四年）に発刊されている。しかし、ここで一端刊行は途切れ、『漢文学会会報』の復活は戦後を待たなければならなくなる。この他にも、昭和十四年、会員相互の親睦向上を図り、卒業生の会員との連絡を保つことを目的とした機関誌『崑崙』も創刊されている。[22]三学会（国史学会も入れると四学会）の中で最も遅くに発足した同学会は、発足以後急速に活動基盤を整えていったことがわかる。

二　戦前の学会活動と教育

三学会の発足と研究発信は前述のようなものであったが、それ以外に行っている活動というのは、具体的にどのようなものであったのだろうか。ここでは、学会毎に戦前の活動の様子を追っていく。

①　国文学会

『国文学論究』創刊号の序文には、次のような文章が記載されている。

〈史料三[23]〉

国文学論究の開板に当つて、一こと、開口らしいことを申し添へねばならぬ。此は、國學院大學国文学科において、過去数年間に提出せられた卒業論文の、ごくの一部である。普通の習慣通り、最優秀なものを、御目にかける訣なのであるが、必ずしもさう言ふ目安だけを以て、選択した訣でもない。其研究の性質上、尚数年、十数年の年月をかけねばならない、と謂つたものは、必しも、非常の出来ばえを示して居ないまでも、その発足を意味あらしめる為と言ふ、あなた方の御同情に俟つ考へもあつて、採録した事になつて居るのです。過去の分にも、現在堆積して居るもの丶中にも、将又、将来ほんたうの形をとる筈の物にも、まだ〳〵、見て頂きたいものはある。追つて、第二輯・第三輯として、お目にかけるつもりで居ます。

右は、折口信夫・金沢庄三郎による序文であるが、本機関誌の刊行目的が、国文学科生の卒業論文の掲載にあった事が確認できる。学生生活の集大成として出した学生の研究をお披露目する事を目的とし、研究者としての第一歩を踏み出した者達の研究発表の場を提供している。この姿勢は後にも受け継がれており、柳田国男や折口信夫など、当時の大家達も同誌に論文が掲載される一方で、第十冊の編輯後記には「論究は次号から学生の発表機関を第一義とする。今、学会の雑誌の存在価値は、それ以外にないと思ふからである」[24]とあり、学生の研究発表に重点を置く機関誌であったと言える。

『国文学論究』の例からも窺えるが、国文学会は在学生に対する教育指導も充実していた学会であった。その代表例の一つとして、毎週国文研究室における研究会（輪講・輪読会）が挙げられる。昭和九年には、折口信夫の下で「質問会」（火曜午後六時）、武田祐吉指導「霊異記研究」（月曜午後四時半）が行われており[25]、以降も指導者・分野を増やして行われている。昭和十一年には、折口信夫「梁塵秘抄輪講」（隔週火曜午後四時半）、武田祐吉「堤中納言物語輪講」（毎週月曜午後四時半）、金田一京助「アイヌ神謡講義・天草本伊曾保物語輪講」（隔週火曜日午後四時半）、助手三谷栄一「写本木版本による源氏物語輪読会」（毎週水曜午前九時）が行われている他、学会行事として学友会附属室で、助手三谷栄一「竹取物語輪講」（毎週金曜午後四時半）も行われた[26]。学びの機会が、授業以外に多く設けられ、当時の教授・講師陣、助手らによる指導を受けられたことがわかる。これらの会は多少内容・指導者の変動はあるが、昭和十八年まで確認できる。

そして、輪講等を中心とした研究会以外にも、学生の研究発表会もあった。こちらは確認できる範囲では、昭和十一年が初見であり、十二月二十八日に、丸沢英敏「芥川龍之介論」、白井永二「童謡考」、臼田甚五郎「今様の流転」の三者の報告があった[27]。こちらも幾度も行われ、卒業論文発表会も含め、おおよそ一年に三―四回、一回につき二―三人程の学生が研究発表を行っていたが、年を追う毎に縮小し、昭和十六年一月三十一日・同二月三日の卒業論文発表会を最後に確認出来ない[28]。だが、講評なども行われ、学生の能力向上に大いに資する事のあったものと考えられる。

そして、当時の学生達の一番の楽しみと考えられるのが、見学旅行・観劇等の学外活動である。筆者は以前、国史学会でも見学旅行が行われ、当時の国史学会に所属する学生にとって楽しみな一大行事であったことを指摘している[29]。国文学会でも似たような行事が催されており、昭和十一年には世田谷の静嘉堂文庫見学が確認できる[30]。ここでは武田祐吉が引率し、三十三名の一行が古典籍の原本を目にしている。以降も、同年十一月八日に万葉遠足と称し、折

口信夫引率で旧南多摩郡（現町田市）小野路村の院友宅で折口の東歌に関する話を聞き、多摩の横山にて過ごしている他、同十二月四日には三谷助手引率で名古屋蓬左文庫を見学し、河内本源氏物語の解説を現地で受けている。[31] 昭和十二年には増田助手引率で目黒の尊経閣文庫を見学し、[32] 昭和十四年には石橋助手の引率で宮内省図書寮にて、看聞日記、年中行事絵巻などを閲覧している他、[33] 歌舞伎研究会が発足し、明治座・歌舞伎座の公演を見ている。加えて昭和十四年には、念願の京都・奈良万葉旅行が行われた。万葉旅行（遠足）自体は昭和十一年にも行われているが、当時も元々は大和方面の旅行を計画していたところ日程・費用の面で頓挫したということもあり、同年の決行は意義のあるものであったと言えよう。十一月二十日から二十五日まで桂離宮―室生―長谷―三輪―多武峯―上市―吉野―久米寺―岡寺―高田―当麻と見学してまわり、折口信夫の案内の下、各地の名勝や寺社等を巡っている。[34] この万葉旅行は国文学会の中でも特に大きな見学旅行であった。しかし、これ以降見学旅行や観劇等の記述は確認できなくなり、学会活動の中で徐々に消滅してしまったと考えられる。一方で参加できた学生達にとっては、直接原史料に触れることが出来る貴重な機会であったと言えるだろう。

国文学会の活動は、例会・大会で当時の第一線で活動する研究者の報告を行う一方で、機関誌『国文学論究』では卒業論文も掲載しているなど、学生の研究発表の場としても機能しており、次世代の研究者の養成も重要視している。このような地盤作りのために学生報告会、指導を行う研究会（輪講会）、見学旅行等が行われ、能力向上を図る場が充実していたことが確認できる。

②　道義学会

先述の通り、道義学会にも機関誌は存在するのだが、五輯までしか確認できない上、具体的な事業などがわかる彙

報欄が設けられているのが実質第一輯のみであり、活動の全容が不明瞭な部分が多い。そのため、道義学会の活動については、主に当時の「國學院大學新聞」（以下、「大学新聞」）から推測するほか無いというのが実情であることをご了承いただきたい。なお、道義学会について「大学新聞」から確認できるのは昭和十七年いっぱいまでで、以降の活動は不明である。道義学会については髙野氏の論考にて概要が既に紹介されているため、そちらも参照いただきたい。[35]

一章でも示したが、道義学会における例会報告というのは、道義学科在学生や卒業生も多いように、例会が学生の研究発信を行い、このような経験を積む場としても機能していたことが確認できる。このことからわかるように、道義学会においては学生への研究指導も活発であった。その一つとして、学生らによる研究発表会も行われている。『道義論叢』初輯には、「昭和八年度道義学会々報」が掲載されており、その中で以下の学生研究発表会が行われている事が確認できる。

〈史料四[36]〉

神道の正統としての垂加神道　（六　月）安津素彦君
レヴィジョニステンの社会理論　（九　月）齋藤孝司君
「大学」の根本精神　（十　月）中村正明君
国民道徳史方法試論　（十　月）西田長男君
佐藤信淵の世界観　（十一月）生田　清君
民族主義の根拠　（十一月）吉村六郎君

中臣寿詞の研究　（十二月）米津千之君

おおよそ月に一―二回ほどのペースで行われていたようである。この活動は道義学会の活動の中でも継続的に行われていたようであり、昭和十七年十二月の「大学新聞」の記事からは、毎週金曜日午後四時半より学生研究発表会が行われている事が確認できる。[37] 道義学会において、授業外で学生の報告の場を設け、教育を補完する場を確保していた事が確認できる。

学生教育の場としても同会が重要な役割を担っていた事については、道義学会に所属する当時の教師陣・助手による研究会も見逃せない。こちらも、当時在籍していた学生向けのものであり、昭和八年頃には行われていた。昭和八年当時の研究会は、倫理研究会と哲学研究会に分かれており、倫理研究会では毎週土曜日に日本書紀をテキストとして河野省三教授が指導を行っている。一方哲学研究会では、毎週水・金・土に研究会が開かれており、水曜は小野祖教講師がフッサールの著作を、金曜日・土曜日は松永材教授がニーチェとスピノザの著作を用いて指導している。[38] この研究指導会は年度によって指導者と内容を変えながら続けられており、例えば昭和十年はギリシャ語（波多野講師・火曜九時）、哲学史（小野講師・土曜零時半）、哲学（松永教授・土曜午後二時半）、日本書紀（河野学長・土曜十時）というラインナップであったが、[39] 翌十一年は日本書紀（河野学長・土曜零時）、ウィンデルバンドのプレルーディエン（小野講師・水曜四時半）、読史余論（安津助手・月曜四時半）となっている。以降も毎年研究指導会はテキストと講師を変えつつも行われており、[40] 学生教育の充実が同会において極めて重要視され、そのための研究会の充実であったと言えよう。

学生向けの活動としてもう一つ挙げられるのが、見学旅行・遠足会である。確認できる範囲では、昭和二年六月下

旬に武蔵高麗方面へ見学旅行をする予定が「大学新聞」に掲載されており、[41]かなり早い段階から行われていた事が確認できる。以後も昭和四年に河野教授宅を終点とする春季ピクニックや、[42]一般参加も募集した秋川渓谷への遠足も行われている。[43]史料上から確認できる見学や遠足の例が少ないため、実際にどれくらいの頻度で行われていたのかは不明であるが、普段の学校生活とは異なった経験は、良い刺激となった事であろう。

以上が道義学会の主な活動であった。昭和十七年以降の具体的な活動は確認できず、さらに、戦後、道義学会の活動は見えなくなってしまうため、戦時中にあって如何に活動が変化したのかの確認は出来ない。しかし、ここで触れてきたように、道義学会においても学生への指導の場としても機能しており、研究者醸成に一役買っていた事が指摘できる。

③　漢文学会

最後に漢文学会である。同会も機関誌である『漢文学会会報』に彙報欄がある他、「大学新聞」からもかなり詳細な活動が確認できる。一方、史料の限界で昭和十四年までしか戦前は追う事が出来ないことをご了承いただきたい。

一章で触れたように、研究者が例会・講演会・機関誌発行等の研究発信の中心となる一方で、本学会も学生に対する事業も充実していた。その最もたるものが、研究会である。これは大学の教授・講師陣による学生向けの指導会であるが、昭和九年頃には始まっている。昭和九年には四月から七月には週一回の連続講義として澤田総清指導「本邦古代の漢文（特に懐風藻を中心として）」、九月から翌年二月は担当と内容が変わり、安藤円秀指導「説文」が行われている。[44]更に翌十年には形態が変わり、「楚辞」と「蒙求」が閉講して年度を通して行われている。「楚辞」は教授藤野岩友、「蒙求」は会長斎藤惇が指導を担当しており、一年を通して「楚辞」は十八回、「蒙求」は十五回の講義が行

われた。[45] この研究指導会は、「大学新聞」昭和十一年六月号（通号七一号）に「斎藤会長先生、藤野先生のご熱心な御指導と会員の努力とによって楚辞・蒙求の講義を予想以上の成績に終了した後を受けて、本年度も更に一層の努力をすべく同様に…」[46] という文言から、好評を博し、以後週一回、曜日毎の研究指導が行われていった。内容も年々変わり、昭和十一年には川又武指導「輶軒語」（火曜）・澤田総清指導「文選」（木曜）[47]、昭和十二年は、澤田瑞穂指導「白話趣味文選」（木曜）・川又武指導「経学歴史」（金曜）の他、一学期には「古文真宝」の素読会も行っていた。[48] 昭和十三年には大浜晧指導「近思録」（木曜）・藤野岩友指導「周礼春官」（金曜）があり、[49] 年度によって多様な研究指導会が行われている。特に昭和十二年の「古文真宝」は初学者向けである他、[50] 昭和十三年六月には新入会員向けの「志那学入門」講座を開いており、[51] 初学者向けの指導も充実していた事が窺える。

これらの活動を受けてか、学生研究発表会も昭和十三年には行われている。第一回は六月七日に西岡弘「志那古代に於ける数詞に就て」であり、以降七月一日、十二月二十三日、翌十四年一月十七日の計四回行われている。[52] 何れも熱心に行われ、一・三回には夫々澤田瑞穂・藤野岩友ら指導者側も出席し、講評を行っている。

これらの指導の他、漢文学会でも見学・旅行が行われている。確認できる最初の事例は昭和九年で、十二月十六日に講師の諸橋轍次が引率し、長沢規矩也による説明した静嘉堂文庫の見学をしている。[53] 以降見学は活発に行われており、昭和十年六月には足利学校図書館を、同十月には所沢飛行学校を見学して山口・村山貯水池方面へピクニックを行う、[54] 昭和十一年には六月に静嘉堂文庫、[55] 昭和十二年には五月に金沢文庫、[56] 昭和十三年は五月に水戸見学旅行、同年十月には靖国神社参拝後高尾山に登り、小仏峠を越えて与瀬に出て新宿に戻る、という秋期懇親旅行、十二月に湯島大聖堂を参拝している。[57] 中でも、昭和十年足利学校見学において、「論語義疏・古文尚書・古文孝経等手にとりて見ること得たり」[58] と記す他、昭和十二年金沢文庫見学でも「円覚経・文選・明儒願文集・本朝文粋を始め、数多の典籍・

美術工芸品の並ぶ観覧室に私共は時の経つのも忘れてゐた」[59]とあるように、生の史料に触れる機会を設けるという意味合いでも、当時の学生達にとって良い学びの場となったと推測される。また、この金沢文庫見学では、金沢文庫以外にも付近の史蹟を散策し、帰途江ノ島にて遊び、料亭にて歓を尽くしたともあり、良い息抜きとなった事だろう。

以上が戦前における漢文学会の活動であった。例会・講演会・機関誌発刊は当時の研究者達の研究発信の場となっている一方で、在学生向けの指導会・発表会・見学会が充実しており、活動に棲み分けがされていたようである。

三　戦後の國學院大學における学会

戦後、国史学会と共に國學院大學の学会活動を担った国文学会・道義学会・漢文学会は、戦後、どのような道を辿ったのだろうか。最後に、戦後の三学会の行方について、追っていきたい。

①　国文学会

戦後の昭和二十一年、学友会に所属する組織である文学会が設立され、昭和二十二年三月には機関誌『日本文学論究』の第一冊を刊行している。以後、同二十三年十一月までに五冊を出したが、ここで刊行が一端途切れ、昭和二十五年十二月に国文学会名義の『日本文学論究』第六冊として刊行された。このことについて同冊の編輯後記には、「若い世代の学問への情熱が、諸先輩の残した学的成果としての『国文学論究』を、『日本文学論究』と改題して、その復刊第一冊を学会に送ったのは昭和二十二年三月のことだった」、「尚、本誌は第五冊まで文学会の機関誌としてその成果を収めて来たが、本号より、学友会に所属する文学会とは別に、文学部・研究室を主体とする国文学会を組織し、その機関誌として活動することになった。国文学会の組織に就ては、改めて御通知申し上げる予定である」とあ

り、[60] 学友会組織下の文学会で出された『日本文学論究』を、戦前の『国文学論究』の後継誌と位置づけ、更にそれを新生国文学会の機関誌として取り込むという段階を踏んでいたことが確認できる。

戦後の国文学会では、戦前と同じく例会・大会を行っていたと考えられるが、『日本文学論究』の彙報欄には例会・大会記事が無いためその詳細は確認できない。一方で、彙報欄には、文学研究室で行われた研究会（輪読会）が記されている。例えば、昭和二十五年度の文学研究室行事は次の通りである。

〈史料五〉[61]

文学第一研究室

○洒落本研究会　木曜三時半―五時
　指導　折口教授

○郷土研究会　木曜五時から
　指導　折口教授

文学第二研究室

○有坂氏「音韻論」講習会
　月曜三時半―五時
　指導　金田一教授

○研究発表会

十月二十四日　形容動詞論をめぐって
　　吉沢典男氏
十一月十四日　平安時代の謙遜語の二三について
　　和田利政氏

文学第三研究室
○輪講会
古代…火曜　午後三時―五時
　指導　武田教授
　日本霊異記（朝日新聞社・日本古典全書版）
平安…水曜　午前十時―十二時
　責任者　湯本
　和泉式部日記（岩波文庫版）
中世…土曜　午前十時―十二時
　責任者　宮脇
　新古今集美濃の家づと（相磯貞三校註）
近世…木曜　午後三時半―五時
　指導　佐藤教授

浮世風呂（岩波文庫版）
近代…金曜　午後三時半―五時
指導　千勝講師
仮装人物（徳田秋声）

内容を鑑みるに、戦前に国文学会の中で行われた諸研究会・発表会活動が研究室毎に行われるようになったと言える。国文学会移行後の『日本文学論究』彙報には、この研究室における研究会の他、卒業論文題目一覧[62]や国語国文学関係の開講科目一覧[63]の他、国語研究会の行事[64]や国文学会と差別化された後の文学会の活動[65]まで掲載されているため、同雑誌が国文学会だけでは無く、当時の文学科の活動発信の役割を担っている事が言える。なお、文学会の活動として、「雨月物語」・「日本民俗学入門」・「枕草子」・「大和物語」と研究会毎の指導も用意されていた。

以上の記述からは、国文学会が戦後、学友会に所属する文学会とは別に再組織され、文学会が担っていた、文学研究及び文学科の活動を発信する機関誌発行を引き継いだ格好となっていた。また、戦前国文学会で行っていた学生への教育活動は、戦後、研究室の研究会及び文学会へと移行している一方、戦前行われていて戦後無くなった行事として、見学旅行が挙げられる。こちらは、戦後期の混乱で再開する余裕が無かったとも考えられる。

②　道義学会の消滅とその後

道義学会であるが、先述の通り、戦後には名前が一切見えなくなるため、消滅したと考えられる。一方戦後、昭和二十三年の新制文学部設置では、文学部に宗教学科と哲学科が設置され、神道研究は継承されている。そのような中

で、神道宗教学会が設立された。昭和二十二年の創設で、昭和二十三年時の会則には「神道宗教及び宗教一般の学術的調査研究をするを目的とする」（第二条）とある。[66] 同会では例会・大会の他、機関誌発行を主な活動としており、例えば発会大会（昭和二十二年十一月）では宇野円空「本邦農耕儀礼の研究法」・折口信夫「神道の霊魂信仰」、第一回例会（昭和二十三年一月二十四日）は大場磐雄「登呂遺跡と上代信仰」・安津素彦「アーネスト・サトウの神道論」であった。道義学会で担っていた神道・宗教関係の研究発信が、戦後同学会に引き継がれていたと考えても過言ではあるまい。

では、道義学会のその他の活動、哲学系の活動や在学生への教育活動という面についてはどうであったのか。哲学科については先述したが、その他、戦後の本学における哲学系の組織として、哲学会が挙げられる。昭和二十二年二月時点で活動が確認でき、「日本文学に於ける倫理思想の研究」を毎週木・金・土曜日に速水敬二教授・塚越敏講師・古川哲史講師の指導の下に開催している事が確認出来る。[67] 以降も哲学研究室にて、昭和二十三年には「カントの純粋理性批判・ヘーゲルの精神現象学」（速水教授）・プラトン「クリトン（独訳）」（山本光雄教授）[68] など、以降も哲学研究室において学生向けの指導研究会が開かれていたことが確認できる。一方、神道系の学生向け指導もあり、昭和二十六年時には、宗教研究室において、安津教授「伊勢神道の研究」（毎週火曜）・堀一郎教授「常陸風土記」（毎週水曜）・岸本英夫講師「宗教原象諸相（岸本講師著）」（毎週木曜）の研究指導会が行われており、[69] 以降も例年確認できる。昭和二十三年時点ではこれらの教育活動は宗教学会名義であり、[70] 道義学会で行われていた学生への指導会については、戦後しばらくして学会活動から独立して行われるようになったと考えるのが妥当であろう。

③　漢文学会

戦後の漢文学会については、再開時期の活動の詳細は不明である。というのも、昭和二十四年に『漢文学会会報』第七輯が復刊したが、同冊の現物が残っていないため、『漢文学会会報』第八輯の昭和二十六年度彙報から活動を確認できる。[71]

同冊彙報には、中国学科開設や研究室新設同年の開設講座も掲載される。特に文学部の一科として中国文学科が開設されたことについて、「待望久しかった中国文学科が、文学部の一科として開設された。従来から中国文学関係の講座は文学部内に開設されてゐたが漸く独立した一科となつた訳で、斯学に志す者にとつて、同慶に堪へない」[72]と、その喜びを表している。また研究室が新設されたことで研究会等もここで行われるようになり、学会活動の場所が確保されたことは、大きな進歩であったと言えよう。

この一方で、従来通り、例会・講演会が行われている。昭和二十六年度は七月三日に、藤野岩友教授「中国古代に於ける不具者尊重の習俗に就いて」の例会があった。公開講演会は十一月十日に行われ、第一部は学部生・卒業生による研究発表で、学部四年杉下晴雄「墨翟の思想について」他三名、第二部は各大学教授による講演で、教育大学教授山岸徳平「日支文学の支流―八居題詠を中心として―」他二名であった。更に十一月三日より五日まで三日間、大学祭行事の一環として中国民俗教室も開かれている。こちらでは、資料二百二十五点・書籍六十八部を出品している。

更に漢文学会では、戦前と同じく研究会や見学も行われていた。研究会については藤野岩友教授「五雑組研究会」（金曜）、西岡弘助教授「十八史略講読」（木曜）、北浦藤郎講師「中国語会話講座」（水曜）、西岡弘助教授「初歩漢文講座」（目白分校・水曜）と初学者向けから史料読みまで充実している。見学については、五月に藤野教授引率で静嘉堂文庫を見学し、「纂図互註周礼」等の典籍を観覧している。秋期懇親旅行では、十一月十一日に西岡助教授を始めとし

た会員で、大倉山に清遊したとある。『漢文学会会報』は昭和三十一年まで次号が発刊されなかったため、その間の活動は不明だが、九輯以降の彙報に研究会・大学祭・見学旅行について記されているため、その後も活発にこれらの活動が行われた事が確認出来る。漢文学会では、戦前からの活動をほぼそのまま継承していたことが言えよう。

当時の漢文学会について、会長の藤野岩友は次のように述べている。昭和三十一年のものだが、それ以前の活動についてわかるため、ここに掲載する。

〈史料六〉[73]

漢文学会が生れてからもう三十年に近く、会報を出すやうになつてからでも二十二年は経つてゐる。戦前までは年一回の発行を続けてをり、北京大学から相互交換の申し込みを受け、一誠堂あたりからバックナンバーの揃つたのを注文されたりして、気をよくしたことであつた。戦後になると定期の刊行も出来なくなり、二回ばかり謄写印刷の形で発行した。それも遺憾ながら後が続かず、講演会や研究会、展覧会や連続講義など、会の行事は円滑に進みながら、会報の発行だけは、毎年見送られてゐた。ところが今度、堂々活字印刷を以て発行されるに至つたことは、真に慶ばしいことゝいふべきである。（中略）

次に漢文学会は学友会の一部会であり、会報は学生のものを主体とすべきである。然るに従来は教員や先輩の論文の発表機関となり、学生はたゞそれを拝読するに止まつてゐた。これも実は止むを得ぬ訣があつてのことだつたのである。今度掲載のものを見ても、殆ど卒業論文もしくはその一部たるべきものであり、これならば、新卒業もしくは上級の諸君なら、手持ちのものをその侭投稿し得るわけである。以前に在つては全くかうした便宜が無かつた。会員の大半を占める高等師範部の学生には卒業論文は課せられず、学部の論文には漢文を主題とす

るものは殆ど見られなかつたのである。それに論文作製の作業場たる漢文の研究室も設けられてはゐなかつた。これらの点から考へると、先輩の学生諸君を責めるわけにはゆかないのである。一体卒業論文こそは、学生諸君がその生命を打ち込んでやる為事であつて、こゝに載せたものは、何れも二年ほどの努力の結晶である。かゝる貴重な力作を日の目も見せずに、学校の倉庫の中に眠らせておくのは、勿体ない話である。今度それが衆人の前に公刊され、一の業績として世に残ることになつたのであるから、当人の努力も生き、後進の励みにもなり、これほど結構なことは無い。（後略）

戦前は北京大学と機関誌を相互交換する一方、会員の大半は高等師範部生で卒業論文が無く、しかも漢文学科が無いため研究室も無ければ卒業論文で漢文を扱う学生も少ないという状況で、学生の論文が掲載できない事情があったことを述懐している。戦後中国学科が開設されたことによりこれらの問題が解消され、学生の論文も掲載できるようになったとあり、学会にとっても学科設置が転換点であったとわかる。また、この時期の漢文学会が、学友会の一部会であることも確認できる。この特徴が、戦前から続く学生教育の面を担っていた理由でもあったことは想像に難くない。

おわりに

戦前の國學院大學で活動した国文学会・道義学会・漢文学会は、大正―昭和期に設立され、昭和八年前後には機関誌も発刊を始めている。戦前の活動は、三学会共に、例会・大会（講演会）、機関誌発行といった研究発信以外に、学生向けの研究会（指導会・輪講会）、学生報告会、見学旅行が行われていた。はじめにでも触れたが、国史学会でも学生向けの教育活動が充実しており、学生教育活動が当時学内学会で普遍的に行われており、学会の機能の一つで

あった。特に見学旅行がどの学会でも行われており、学生にとっても普段の授業や研究会とは異なる上、生の史料に触れることができる貴重な機会として良い体験となったことは想像に難くない。これらの活動が、國學院大學における次世代の研究者養成に一役買っていたと言える。他方、国文学会は、例会・大会で研究者が報告する一方で、機関誌には卒業論文も掲載し、学生の研究発表の場としても機能するが、道義学会では例会報告は主に在学生や卒業生が報告する、漢文学会では例会・講演会・機関誌は研究者の研究発信の場となり、在学生の発信が殆ど見受けられないなど、学会によって、研究発信活動の内訳は異なっている。

戦後、学会にも転機が訪れる。戦前、これらの学会は学友会に所属する部会であったが、[74] 戦後国文学会は、学友会に所属する文学会とは別に再組織され、文学会が担っていた機関誌発行を引き継ぐ一方で、学生への教育活動は、研究室で行われる研究会と文学会に移行し、見学旅行は行われなくなった。道義学会は戦後活動が確認できなくなり、消滅したと考えられるが、かつて担っていた神道系の研究発信については、新たに設立された神道宗教学会が行うようになった。他方、学生への教育活動は、哲学系では戦後組織された哲学会にて学生向けの指導研究会が開かれ、神道系の学生指導は宗教研究室において担っており、戦後学会活動から独立して行われるようになった。これらの学会に対し、漢文学会は、学友会に属し、戦前からの活動をほぼそのまま継承していた。

以上が戦前・戦後期における國學院大學の学会活動であった。戦前の学会では研究発信に加え、研究会等の学生教育活動も盛んであり、能力向上に大いに資するところがあったと考えられる一方、戦後は学生教育を分離していく学会が多かったが、昭和三十一年時、学友会に残った漢文学会では学会活動に学生教育を内包していた事が確認出来た。とはいえ、どの専攻においても戦後になっても授業外での教育指導の場を依然として用意しており、このような活動を重要視していたことは事実である。

一方で、本稿では昭和三十年で学会活動の確認を一端切ってしまっているため、その後の活動を見ることも、学会活動の変化を知る上で必要不可欠である。更に、戦前・戦後期において、國學院大學の学術団体として、学会以外にも、郷土研究会、上代文化研究会などに代表される様々な研究会の活動が存在した。こちらの活動についても確認していく必要があるだろう。この辺りについては、今後の課題としたい。

註

（1）齊藤みのり「戦前・戦後期における国史学会の活動と教育」（『校史・学術資産研究』一三　令和三年）

（2）国史学会でも、講習会・見学旅行といった活動が行われており、戦後、これらの活動は独立し、学友会に所属する史学会に引き継がれた。詳細は前掲拙稿「戦前・戦後期における国史学会の活動と教育」三章。

（3）『國學院大學百年史　上』國學院大學　平成六年　五〇一頁

（4）『國學院大學百年史　上』五〇一―五〇二頁

（5）『國學院大學百年史　上』六五九―六六〇頁

（6）『国文学論究』七　国文学会　昭和十三年　一三三頁

（7）『国文学論究』八　国文学会　昭和十二年　一一五―一一七頁

（8）前掲『国文学論究』八　一一五頁

（9）髙野裕基「皇典講究所・國學院大學の「神道」研究と道義学科」（『國學院大學研究開発推進機構紀要』九　平成二十九年）一〇四頁

（10）『國學院大學百年史　上』六五九頁

（11）『國學院大學新聞　縮刷版　創刊号―第三〇〇号』（國學院大學新聞学会　昭和四十三年。以下、『大学新聞』）一　昭和二年　一頁。

（12）『大学新聞』一（記念号）昭和七年　一七五頁

（13）『大学新聞』七四　昭和十一年　二七七頁。なお、この展覧会は「第二回目」と記されているが、一回目がいつ行われたかは不明

である。

(14)『大学新聞』九一　昭和十四年　三〇四頁、『大学新聞』九二　昭和十四年　三一三頁
(15)『大学新聞』六五　昭和十年　二四五頁
(16)國學院大學中国学会ＨＰ（https://www.kokugakuin.ac.jp/education/fd/letters/docl/about/p2）
(17)『國學院大學百年史　上』七四五―七四六頁
(18)『漢文学会会報』創刊号　漢文学会　昭和十年　四三頁
(19)『漢文学会会報』二　漢文学会　昭和十一年　九八―一〇〇頁
(20)前掲『漢文学会学報』創刊号
(21)前掲『漢文学会学報』二
(22)國學院大學中国学会ＨＰ　会報と崑崙（https://www.kokugakuin.ac.jp/education/fd/letters/docl/about/p2/p2）
(23)金沢庄三郎・折口信夫編『国文学論究』創刊号　高遠書房　昭和九年　序文。なお、創刊号と第一冊は別々に出されており、第一冊以降国文学会名義となる。
(24)『国文学論究』十　国文学会　昭和十四年　編集後記
(25)『大学新聞』五七　昭和九年　二〇九頁
(26)『国文学論究』二　国文学会　昭和十一年　一二一頁
(27)『国文学論究』四　国文学会　昭和十二年　一一七頁
(28)『国文学論究』十四　国文学会　昭和十六年　五九頁
(29)前掲齊藤「戦前・戦後期における国史学会の活動と教育」一五九頁
(30)『国文学論究』三　国文学会　昭和十一年　一三四頁
(31)前掲『国文学論究』四　一一七頁
(32)前掲『国文学論究』七　一三四頁
(33)前掲『国文学論究』十　六〇頁
(34)「万葉旅行記」（『国文学論究』十　国文学会　昭和十五年　五三―六五頁）。当時この旅行に参加していた学生達の回顧録であり、

旅程だけでなく、当時の学会の空気も窺える。

(35) 前掲髙野「皇典講究所・國學院大學の「神道」研究と道義学科」

(36) 『道義論叢』一　道義学会　昭和八年　六七頁

(37) 『大学新聞』一三七　昭和十七年　四三五頁

(38) 前掲『道義論叢』一　六八頁

(39) 『大学新聞』六八　昭和十年　二五七頁

(40) 『大学新聞』で道義学会の活動が確認できる下限の昭和十七年十二月迄活動が確認できる。(『大学新聞』一三七　昭和十七年四三五頁)

(41) 『大学新聞』一　昭和二年　一頁

(42) 『大学新聞』二三　昭和四年　九三頁

(43) 『大学新聞』七八　昭和十二年　二八五頁

(44) 前掲『漢文学会学報』創刊号

(45) 前掲『漢文学会学報』二

(46) 『大学新聞』七一　昭和十一年　二六九頁

(47) 『漢文学会学報』三　漢文学会　昭和十二年　八六―八七頁

(48) 『漢文学会学報』四　漢文学会　昭和十三年　八一頁

(49) 『漢文学会学報』五　漢文学会　昭和十四年　八七頁

(50) 『大学新聞』七八　昭和十二年　二八五頁

(51) 『漢文学会学報』五　漢文学会　昭和十四年　八八―八九頁

(52) 前掲『漢文学会学報』五　八八―八九頁

(53) 前掲『漢文学会学報』創刊号　四三頁。同見学会では、長沢規矩也による説明も行われた。

(54) 前掲『漢文学会学報』二　九九頁

(55) 前掲『漢文学会学報』三　八六頁

(56) 前掲『漢文学会学報』四　八一頁
(57) 前掲『漢文学会学報』五　八七―八九頁
(58) 前掲『漢文学会学報』二　九九頁
(59) 前掲『漢文学会学報』四　八一頁
(60)『日本文学論究』六　国文学会　昭和二十五年　七三頁
(61) 前掲『日本文学論究』六　七二頁
(62) 前掲『日本文学論究』六　七一―七二頁
(63)『日本文学論究』十　国文学会　昭和二十七年　六七頁
(64)『日本文学論究』七　国文学会　昭和二十六年　六六頁
(65) 前掲『日本文学論究』十　六八頁
(66)『神道宗教』一　神道宗教学会　昭和二十三年　三六頁
(67)『大学新聞』一五一　昭和二十二年　四六九頁
(68)『大学新聞』一六七　昭和二十三年　五〇四頁
(69)『大学新聞』一七三　昭和二十六年　五一三頁
(70)『大学新聞』一六三　昭和二十三年　四八九頁
(71)『漢文学会会報』八　漢文学会　昭和二十七年　八二―八六頁
(72) 前掲『漢文学会会報』八　八二頁
(73)『漢文学会会報』九　漢文学会　昭和三十一年　一―二頁
(74)『國學院大学百年史　上』八二八―八三七頁。なお昭和十五年の学友会改変により、従来の活動が停滞し、昭和十六年四月には学友会は修練報告団へと改組されている（『國學院大學百年史　下』八九三頁）。